

東地区集楽環境保全会（岐阜県下呂市）

「“ひがし”でできるんだったら、うちでもできるんじゃないか〜」って、世界中の人に言わせてみたい！

背景

飛騨地方最南端に位置する下呂市金山町東地区は、地区の中央を南下する清流「馬瀬川」沿いの河岸段丘に形成された10の集落から構成されている。

かつては林業や製茶、製糸業が盛んであったが、進学や就職を契機とした若年層の流出により人口減少と高齢化が進展。平成20年代半ばになると獣害の深刻化や畦畔管理が担い手の農業経営を圧迫するようになり、非農家も参加して集落環境の保全に取り組む機運が共有されてきた。これを受け、集落ごとのワークショップを積み重ね、平成26年11月、地区内の全戸（約500戸）が参加して「東地区集楽環境保全会」（以下「保全会」）を設立した。



取組概要

保全会の設立により「2階建て集落営農方式」による取組を開始。1階部分を担う保全会が集落環境を守ることで、2階部分の担い手の営農を支援している。

平成29年には、新規就農による担い手の確保に向け、地区内農地の利用調整を行う「（一社）ひがし村」を設立し保全会の構成員とした。これにより、保全会が主体となって、条件の良い農地や空き家を新規就農者に仲介するとともに、一定の所得が見込まれる「飛騨トマト」の施設栽培での就農を推進。これまでに5名が新規就農しており、技術的な支援だけでなく、地域との付き合い方もしっかりとフォローすることで、安定した取組となっている。また、（一社）ひがし村では、耕作放棄地を解消した農地での飼料作物やエゴマの栽培にも取り組むとともに、更なる人口減少を見据え、水稻のドローン防除の開始や農地管理等への、ほ場管理システム導入により、スマート農業にもチャレンジしている。

廃校となった東第一小学校を「持続可能な地域運営の拠点」として活用するため、下呂市と保全会とで利用協定を締結。定期的に廃校活用検討会を開催して具体的な活用方法を検討。毎週日曜日には若い世代が中心にアイデアを出し合って楽しみながらカフェの運営を行うほか、マルシェ、夏祭りなど、様々なイベントの開催を通じて地域内外の交流を促進している。

若い世代の視点を活かした活動の促進と関係人口の創出を目指して、令和3年から「ふるさとワーキングホリデー」の受け入れを開始するとともに、令和4年には日本福祉大学と関係人口連携協定を締結。学生たちは、この地での滞在・活動を通じて、地域住民との交流を深めており、将来の関係人口として継続することを期待している。また、東地区を拠点に活動した2名の地域おこし協力隊員は、任期終了後に定住。岩屋ダムでのカヤックツアーや空き家を活用したボルダリングジムなど、地域資源を活用した新たな発想で起業し、地区内外の交流促進に貢献している。

今後の展開

今後は、営農関係の新法人の設立やUターン者の新規就農に向けた支援のほか、農業外での起業についても支援。また、関係人口案内所の設立、隣接集落と連携した移住イベントなど、東地区の活性化に向け、更なる活動のステップアップにより、地域の維持・発展を目指す。

写真で見る団体の取り組み



水路の土砂上げ



トマト栽培の新規就農者



活動拠点となる旧東第一小学校



廃校での「骨粗しょう症のお話し会」



大学生の参加で3年ぶりに復活した神社の例祭「お旅」



空き家を改修したボルダリングジム

鞍掛山麓千枚田保存会（愛知県新城市）

棚田と里山が育む生物多様性

背景

愛知県新城市北部に位置する四谷地区は、標高883mの鞍掛山麓の南西部に広がる四谷の千枚田とその周りを囲む50戸ほどで形成されている。かつて千枚田は1,296枚の田を有していたが、経済成長に伴う都市部への人口流出により、平成元年には田の数は373枚まで減少した。

こうした状況の中、これ以上の農地減少を防ぎ、「日本の三大石積み棚田」と称される美しい景観を守るため、都市住民との交流による棚田の保全活動を通じて、農業労働力の確保や集落の活性化を図ることを目的として、平成9年に「鞍掛山麓千枚田保存会」（以下「保存会」）を設立した。



取組概要

保存会が中心となり、平成12年に四谷集落協定を締結。中山間地域等直接支払制度を活用して年5回行う草刈り等の作業には、毎回二十数名が参加し棚田の景観環境の整備を行っている。また、耕作者の収入確保の手段として、千枚田で生産した米（ミネアサヒ）を株式会社丸八製菓（愛知県豊橋市）へ出荷し、「千枚田五平餅」を製品化。地域特産品として、東三河地域郵便局の「ふるさと小包」、道の駅「もっくる新城」、ネットショッピング等で販売し好評を博している。

イベントへの協力等を通じて他組織との関係を徐々に深め、千枚田保全のための連携関係を構築した。地元の小学校、専門学校や企業が行う農業体験学習や研修を通じて食育や社員教育に貢献している。平成18年からは、横浜ゴム株式会社新城工場の社員研修やボランティア活動に協力。同社は、平成24年から四谷の千枚田全域を調査地点にした生物多様性調査を行っており、平成26年には2か所のビオトープを造成し、外来生物の除去等の活動を継続している。

自然豊かな景観と生物多様性に富んだ四谷の千枚田は、平成22年に名古屋市で開催した「生物多様性条約第10回締約国会議」（COP10）の誘致にも貢献。会議翌日のエクスカージョンでは14カ国21名が視察に訪れた。その後も、世界各国の農学研究者等が視察に訪れており、国際協力機構（JICA）の現地研修会も行われている。

棚田では、都市住民との交流イベントとして、毎年6月第1土曜日には「お田植感謝のタベ」を、12月第2日曜日には「収穫感謝祭」を開催。農道沿いに1,500本のロウソクを灯したり、つきたての餅やシシ鍋の提供、アマチュアミュージシャンによる天空のコンサートなど様々な催しが行われており、これらは地域ぐるみの行事として定着。今では、年間約2万人もの人たちが「癒し」と「古き良き日本の原風景」に会える場所として訪れ、新城市及び愛知県の顔と謳われるまでに至っている。

今後の展開

先人たちから引き継いだ四谷の千枚田の素晴らしい景観と自然環境を守るため、都市近郊から来る関係人口と協力し、様々な活動に取り組みながら未来へ繋いでいく。

写真で見る団体の取り組み



高低差200mを誇る四谷の千枚田



地元小学生の稲作体験

1500本のロウソクが灯る
お田植感謝のタベ

千枚田五平餅



COP10でのエクスカージョン



国際協力機構（JICA）の現地研修会

株式会社 ^{しちてんぱとう} 七転八倒（三重県伊賀市）

田舎の価値を “INACACHI” へ

背景

株式会社七転八倒が活動する伊賀市川北地区は、伊賀市中央部に位置しており、若者の都会への流出等により、農林業従事者の高齢化と後継者不足が進み、休耕田畑や管理の行き届かない森林が増えていた。

こうした現状と将来に危機感を抱いていた住人が、平成29年に、大阪からの移住者（元経営者）に相談を持ちかけたことが契機となり、「田舎こそが“自然と人が共生する最適解”」と考え、地域住民参加型事業の構築・実現を決意。地域を変えたいと思い活動している人に声をかけ、平成30年に農家、主婦等5名により「株式会社七転八倒」（以下、「七転八倒」）を設立した。



取組概要

七転八倒では2ha以上の水田で米を生産しており、そのうち40aで独自の減農薬栽培ブランド米「^{ふき}落だわら米」を生産し、販売している。さらに、「米本来の味を多くの人に知ってもらいたい」「日本の伝統製法を後世に残したい」との思いから、50年ぶりに復活させた自然乾燥法「はさがけ」による「落だわら はさがけ米」も販売している。また、水田では京都大学カレー部がイベントで使用するお米を合宿しながら生産したり、貸農園では野菜の無農薬栽培を指導するなど、「食」の観点で人々の命を支えている地域の人々と触れる機会を提供している。

令和4年からは、空き家を改修した「古民家カフェ365nichi」の運営を開始。ここでは、地元の素材（米、野菜）を活かした料理を提供。伊賀焼の土鍋で落だわら米を炊飯し、無農薬栽培の蒸し野菜とあわせてシンプルに提供することで自然のおいしさをアピールしている。カフェでは、地元農家が生産した野菜の買取を行うとともに、主婦や女性がスタッフとして働きやすい環境を整えて地域の人材を雇用するなどを通じて、地域の所得創出にも貢献している。

このほか、古民家カフェ365nichiでは、餅つき、周年感謝祭、田舎の結婚式再現（50年ぶりの花嫁行列の復活）などの地域と都市住民との交流を図るイベントを開催するとともに、古民家を活用した農泊にも取り組み、地域の活性化や関係人口の増加に結びついている。

また、会社設立当初から、後継者不足で放置された山林を整備するために必要なチェーンソーや刈払機の技術を習得してもらうため、実践型講習会を継続しており、年々、受講者は増加している。

今後の展開

田舎の諸問題を解決するため農業生産や山林の管理を行い、地域でとれた農作物を使った料理を古民家カフェ365nichiで提供していく。また、大学との連携（京都大学カレー部、関西大学）を継続するとともに、新たなイベントの開催に取り組み、地域内外から人が集まるカフェを拠点に田舎の価値を世界へ発信していく。

写真で見る団体の取り組み



50年ぶりに復活させた自然乾燥で仕上げた「落だわら はさがけ米」



無農薬野菜の栽培を通じて食育活動



地元の食材を生かした古民家カフェ



田んぼでのウェディング



週末田舎人の育成（チェーンソー講習会）



京都大学カレー部との連携